

福祉を学ぶ学生の職業選択における意識調査

～日・米・フィンランド3カ国の比較調査を通して日本の学生の特徴～

介護福祉科 I 部

石川 上出 小西 永田 原 佐藤 山口

要約

日本の福祉学生の福祉職選択に関連する要因とその学生の特徴を明らかにすることを目的とし、仮説として仮説1「日本の福祉学生は他の2カ国の福祉学生と比較して、福祉職選択において主体性に欠ける」仮説2「人と接することを好み、奉仕性を有す、の価値観は3カ国とも同様に高い」として調査することとした。結果、仮説1は肯定され、日本の福祉選択学生は自らの意思で進路を選んだという人の割合が少ないこと。また、仮説2の「人と接することを好み、奉仕性を有する、の価値観は3カ国とも同様に高い」は否定された等、日本の福祉学生の特徴は、主体性が比較的低い人の割合が多く、専門性を身につけることを重視する一方で、対人対応を好むか、奉仕性を持っているかについては、それを問わないと思っている人の割合も多いことがわかった。

キーワード：離職率・福祉職選択・アメリカ・フィンランド

本文

【背景】

現在の日本の介護福祉の問題として、少子高齢社会化の傾向が高まっていくにもかかわらず高齢者介護において、介護福祉士（国家資格取得者）への適切な処遇や社会的地位の確立が遅れていること等が指摘されて久しい。高齢者施設においては、介護福祉士の人員配置が法的に義務化されていないことも、介護福祉士の地位の確立を遅延させてきたことの要因のひとつとされている。介護福祉士の処遇改善対策は「交付金として、全額税金（2.5年間で3900億円）で支給され、全国の89%の事業所が申請し、平均給与額の引き上げが達成できた」とされている。」（2011年10月30日、第38回社会保障審議会介護保険部会）「しかし、時限措置として期間限定のため、2012年度以降が課題となっている。高齢者施設、在宅介護における介護従事者の人材確保の困難性は引き続き厳しい状況である」と小竹 雅子は報告している。施設介護職員の離職率をみると、「平成20年度介護労働実態調査」においては、「施設介護職員の離職率は21.9%であり、全産業の平均（15.4%）を大きく上回っており離職者の74.7%が3年未満に離職している」ことがわかる。また、介護等の業務に従事していない、「いわゆる潜在的介護福祉士は、推定で約20万人」といわれ、「介護福祉士登録者の約4割を占めている」と報告されている。

私たちは、給与等待遇の問題以外にも、介護職員が離職率が高いことの理由のひとつとして、福祉職を選択した人たちのそもそもの動機の弱さがあるのではないかと思われた。高校卒業からすぐに入学してくる介護福祉士養成課程（2年制）には、高校まで福祉に関心のなかったという学生の入学が少なくないという事実がある。なぜ介護福祉科に入学したのかという学生同士の話し合いの中では、親等の周りの意見・推薦が強く反映されたことがわかった。このことは、介護福祉士となって社会に貢献したいという主体性が必ずしも強くないと考えられた。

そして、私たちは海外研修を経験し、日本の外側から日本の福祉を考える機会を得た。日本の福祉と世界の福祉を選択した学生の職業選択の動機等を質問し、比較してみると、日本の福祉、及び日本の福祉を目指す学生の特徴がわかるのではないかと思ったことが研究の動機となった。そこで、日本、アメリカ、そして実習施設が紹介して下さったフィンランドの3カ国の福祉学生の特徴や福祉職のイメージの相違点について比較をすることとした。

目的は、日本の福祉学生の特徴、及び日本の福祉環境の特徴を明らかにすることとした。

【仮説】

日本の福祉学生は他の2カ国と比較してみると、福祉職選択において親の影響を強く受けている。

福祉職は「魅力的」「やりがいがある」「社会的評価が高い」の価値観については国を問わず共通している。

「人と接することを好む」「奉仕性を有する」などの人材の資質については国を問わず共通している。

【方法】

調査方法：アンケート調査（自記式留置質問紙法・自記式集合質問紙法）

分析：単純集計と統計処理はX2乗検定

研究調査期間：平成24年9月～11月

対象者：大阪保健福祉専門学校 福祉系学生 347名
 アメリカ SCカレッジ 学生 35名
 フィンランド O職業訓練専門学校 福祉系学生 55名 合計 437名

表1 質問項目

I	①あなたの所属学科・コース
	②学年
	③性別
	④年齢
	⑤目指す資格
II	①あなたの福祉職選択に家族が影響を与えましたか？
	②魅力的な仕事だと思う
	③やりがいのある仕事と思う
	④将来性のある仕事だと思う
	⑤景気に左右されない安定した仕事だと思う
	⑥一生続けられる仕事だと思う
	⑦社会的評価が高い仕事だと思う
	⑧女性比率が高い仕事だと思う
	⑨人手が不足していると思う

⑩身体的負担が多いと思う
⑪精神的負担が大きいと思う
⑫健康面への不安が大きいと思う
⑬仕事のわりに給料が安いと思う
⑭専門的な知識や技術が必要だと思う
⑮人と接することが好きでないといけないと思う
⑯奉仕性が必要だと思う

出展 滋慶学生職業選択意識調査より抜粋

【結果】

表 2 3カ国の平均年齢

	年齢(平均)
日本	21.7 歳
アメリカ	33.4 歳
フィンランド	28.4 歳

調査対象の学生の平均年齢として、日本 21.7 歳、アメリカ 33.4 歳、フィンランド 28.4 歳であった。日本に比べてアメリカ、フィンランドの学生は平均年齢が高く社会経験や社会の理解も深い人々であることが想定された。

表 3 各質問に「はい」と答えた割合 (%)

質問	①	2	3	4	5	6	7	8
日本	44	97	97	83	67	44	59	78
アメリカ	31	86	100	97	40	91	60	91
フィンランド	22	94	94	94	70	79	46	91

質問	9	10	11	12	13	14	15	16
日本	96	91	92	75	85	95	74	78
アメリカ	49	9	80	34	46	57	97	100
フィンランド	100	79	64	18	91	46	91	94

IIの各質問に「はい」と答えた割合 (%) を示している。①あなたの福祉職選択に家族が影響しましたかの質問では、日本が 44%アメリカが 31%フィンランドが 22%。④将来性のある仕事だと思うかの質問では、日本が 83%アメリカが 97%フィンランドが 94%。⑤景気に左右されない仕事だと思うかでは、日本が 67%アメリカが 40%フィンランドが 70%。⑥一生続けられる仕事かの質問では、日本が 44%アメリカが 91%フィンランドが 79%。⑧女性比率の高い

仕事だと思ふかの質問では、日本が 78%アメリカが 91%フィンランドが 91%。⑨人手が不足していると思ふかの質問では、日本が 96%アメリカが 49%フィンランドが 100%。⑩身体的負担が大きいと思ふかの質問では、日本が 91%アメリカが 9%フィンランドが 79%。⑪精神的負担が大きいと思ふかの質問では、日本が 92%アメリカが 80%フィンランドでは 64%。⑫健康面への不安が大きいと思ふかの質問では、日本が 75%アメリカが 34%フィンランドが 18%。⑬仕事のわりに給料が安いと思ふか質問では、日本が 85%アメリカが 46%フィンランドが 91%。⑭専門的な知識や技術が必要だと思ふかの質問では、日本が 95%アメリカが 57%フィンランドが 46%。⑮人と接することが好きでないといけないと思ふかの質問では、日本が 74%アメリカが 97%フィンランドが 91%。⑯奉仕性が重要だと思ふかの質問では、日本が 78%アメリカが 100%フィンランドが 94%。①④～⑥⑧⑯の質問結果には有意差が見られた。

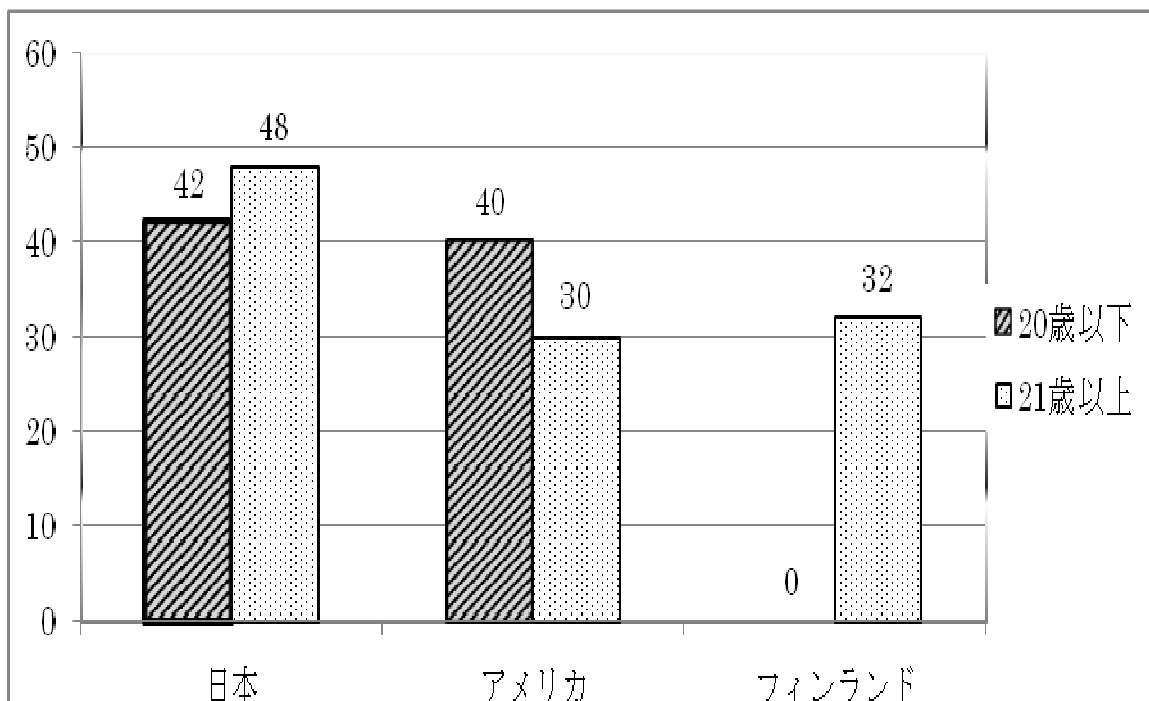


図1 家族があなたの進路に影響を与えた割合

3カ国の年齢層が異なっていたので未成年と成人に分けて家族の進路選択の影響を見た。日本の20歳以下が42%、21歳以上が48%。アメリカは20歳以下が40%、21歳以上が30%。フィンランドは20歳以下が0%、21歳以上が32%の学生が「はい」と回答した。家族が自分の進路に影響を与えた割合は日本が高く、フィンランドが低いことがわかった。

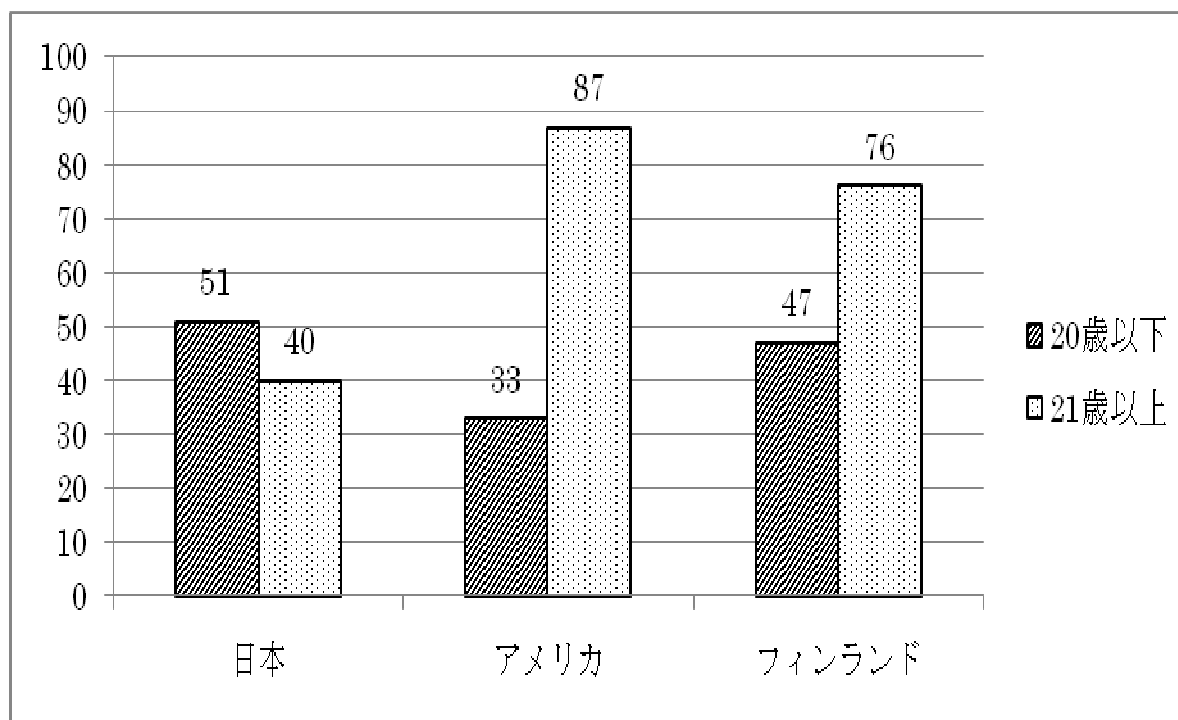


図2 一生続けられる仕事と思う

一生続けられる仕事と思うかの質問では、日本の20歳以下は51%、21歳以上は40%。アメリカの20歳以下は33%、21歳以上は87%。フィンランドの20歳以下は47%、21歳以上は76%の学生が「はい」と回答した。こちらも未成年と成人に分けてグラフにしている。日本の成人以上の学生は一生続けられる仕事と思っている割合が他の二カ国と比べて少ないことである。

表4 福祉職のイメージの結果

	②魅力的な仕事だと思う	③やりがいのある仕事だと思う	⑦社会的評価の高い仕事だと思う
日本	88.9%	96.9%	91.3%
アメリカ			
フィンランド			

②魅力的な仕事だと思う、③やりがいのある仕事だと思う、⑦社会的評価の高い仕事だと思う、の三つの項目については有意差がなく、88.9%、96.9%、91.3%と平均して高い結果となった。

この項目は有意差が出なかった項目で、魅力的な仕事、やりがいのある仕事、社会的評価が高い仕事、の印象は仮説どおり3カ国とも共通して非常に高い割合で肯定された。

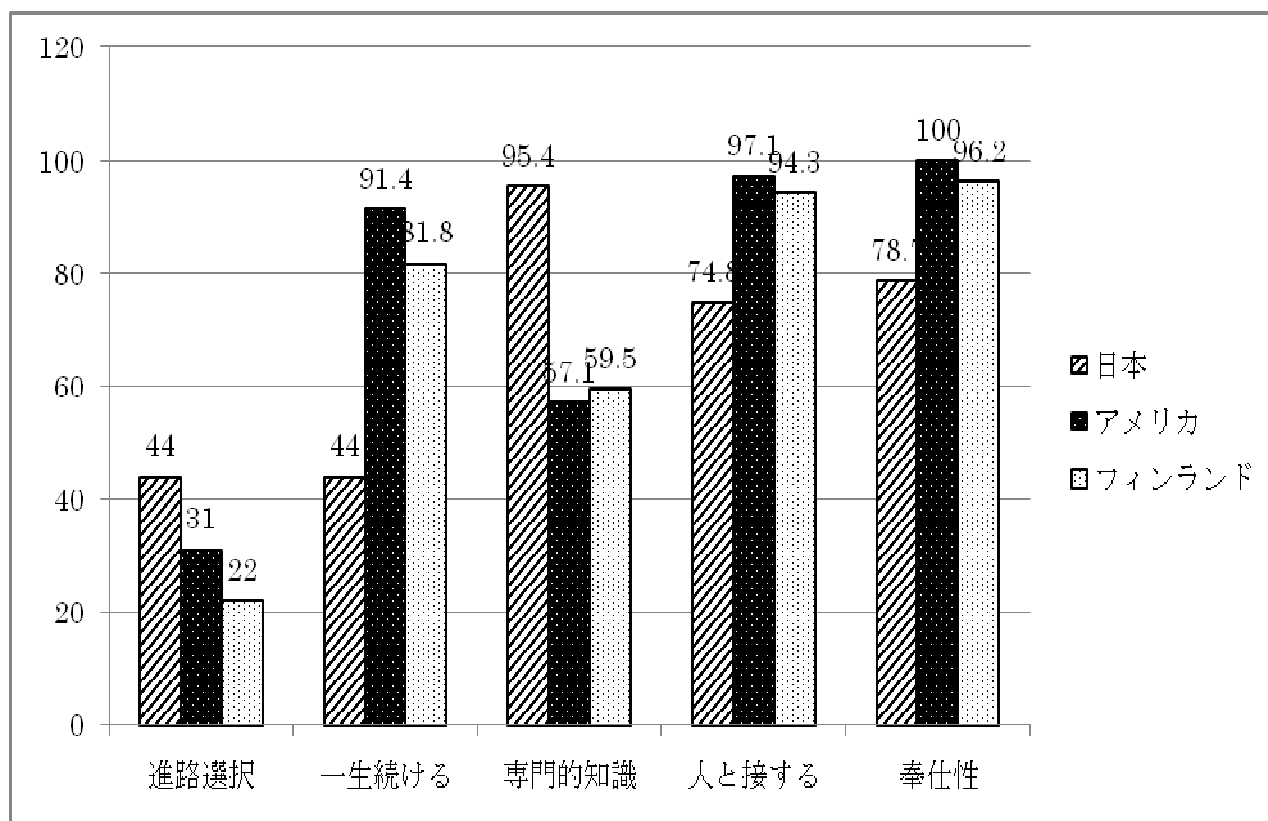


図3 結果まとめ

①あなたの福祉職選択に家族が影響を与えましたか、の質問項目は日本 44%、アメリカ 31%、フィンランド 22%。⑥一生続けられる仕事だと思う、の項目は日本 44%、アメリカ 91.4%、フィンランド 81.8%。⑭専門的な知識や技術が必要だと思う、の項目は日本 95.4%、アメリカ 57.1%、フィンランド 59.5%。⑮人と接することが好きでないといけないと思う、の項目は日本 74.7%、アメリカ 97.1%、フィンランド 94.3%。⑯奉仕性が必要だと思う、の項目は日本 78.7%、アメリカ 100%、フィンランド 96.2%の学生が「はい」と回答した。

【考察】

家族があなたの進路に影響を与えた割合について考察すると学生の福祉職選択に親が影響を与えたかの回答からは、日本学生が多くその影響を受けたと回答した。他の2カ国に比較して、学生の進路選択への主体性という意味では日本の学生は低いという特徴があると考えられた。また、日本の学生が身近な人の意見を柔軟に取り入れて進路を決定しているとも考えられた。注目すべきはフィンランドの未成年の回答が0であった。教育費の面では、親が負担することが2カ国、日本とアメリカでは通常であるが、フィンランドでは教育費が無料であることから未成年の進路選択については学生が完全に主体的に選択しているのではないかと考える。私たちの後輩になる福祉職人材を今後十分に確保していくためには、若い人たちの家族等への福祉職に関する正しい理解を深めてもらうことも重要ではないかと考えられた。

一生続けられる仕事だと思うか、について「はい」の割合をグラフに示した。未成年、成人とで分け分析すると、注目すべきは、一生続けられると思っている日本の学生が極端に少ない

ことである。特に社会情勢について理解している成人のデータに注目してみると割合が高く、この結果となった要因として日本社会が福祉職にとって厳しい状況であることを反映しているのではないかと考えた。

福祉職のイメージの結果としては、この項目は有意差が出なかった項目で、魅力的な仕事、やりがいのある仕事、社会的評価が高い仕事、の印象は仮説どおり3カ国とも共通して非常に高い割合で肯定された。福祉職のイメージは自由主義・社会主義など国の体制に異なりがあっても、魅力があり、やりがいがあり、社会的評価が高いという共通イメージを持っていることが考えられた。アンケート結果から、そのまま読み取ってみると日本の福祉学生は人と接することが特別に好まなくても、また、奉仕性を持っている、と自分が意識していなくても専門知識・技術を身に付けることにより、福祉に従事できるのではないかと考える人の割合が多いという特徴があると考えられた。

図3のグラフについては、アンケートの結果で有意さの出た項目を年齢を分けずグラフにし、まとめたものを比較した。特に日本の福祉学生は、家族の影響を強く受けていること。また、一生続けられると思っている人が少ないこと。そして、人と接することを好む・奉仕性を有すること以上に専門的知識や技術を必要としていることがわかった。福祉を魅力ある仕事、やりがいのある仕事、社会的評価の高い仕事という項目は国家、社会構造の異なりがあっても、共通した認識として持っていることが考えられた。しかし、全体的にみると3カ国の違いは際立っていた。理由としては、質問の意図が正しく理解されて回答されたことの他に、社会保障や税等、国の体制に異なりがあり回答を比較するにおいて信憑性が低い項目もあること。質問紙の中の福祉 (Social Welfare) の指すものが3カ国で必ずしも同一ではなかったことで回答を比較するには信憑性の低い項目もあることが考えられた。例えば、日本の学生は福祉といえば介護福祉を想起する学生の割合が多意のではないかと考えられる。今回の研究では調査をしていないが、アメリカ、フィンランドについても、それぞれ、福祉から想起する内容は異なっているのではないかと考え、分析すべき項目をそれらの影響を受けにくいものに限定し、⑤⑧～⑬までを除いて分析することとした。

【結論】

仮説1の「日本の福祉学生は他の2カ国と比較して福祉職選択において親の影響を強く受けている。」は肯定された。つまり、日本の学生は主体性が弱いと考えることができる。仮説2の「福祉職は「魅力的」「やりがいがある」「社会的評価が高い」の価値観は国を問わず共通している。」は肯定された。福祉を職業にしようとする学生は福祉を魅力・やりがいがあり社会的評価の高い仕事として誇りを持っていると考えているということがわかった。仮説3の「人と接することを好む」「奉仕性を有する」などの人材の資質は国を問わず共通している。は否定された。つまり、日本の福祉学生の特徴としては「主体性が比較的低い人の割合が多く、専門性を身に付けることを重視する一方で、個人的には対人援助を好むか、奉仕性を持っているかについては、その限りではないと思っている学生の割合が多い」ということが今回の研究での結論であった。

世界一高齢化が進む国、日本は福祉を職業とする人材が一生継続して働ける職場環境を早急に整えなければ専門性を持った人材をただ消費していく状況にあることが明らかになった。私

私たちは将来、介護福祉士として様々な高齢社会問題をグローバルな視点で捉え、介護福祉の問題を解決へ向けて取り組みたいという思いを強くした。介護福祉士としての就職を目前に控え、近い将来私たちの職場に、例え志望の動機が弱い介護職を目指す後輩が施設に就職してきたとしても、魅力ややりがいを感じられるように指導をし、ともに職場環境をよくする活動を行っていくことの重要性を知る研究となった。

【参考文献】

けあさぼ 小竹雅子のどうなる介護保険

日本社会事業大学が厚生省老人保健健康増進等推進事業の指定を受けて行った研究報告書

『日本とフィンランドの高齢者にかかわる国際共同研究』

子供（15歳以下）高齢者（60歳以上）の人口の割合ランキング

求められる介護福祉士像に関する意識調査～学生・介護職員のアンケートから～

高齢者福祉サービス供給システムの国際比較研究（その1）

介護福祉士養成施設の学生の介護に関する意識調査

高齢者ケアの二国間比較－日本とスウェーデン－

離職問題から見た介護老人福祉施設で働く介護従事者の職場環境